

## 調査の概要

昨今の目ざましい科学技術の発達で私たちの生活に入り込んできた新しい情報メディアは、小学生の世界にもパソコンやビデオの普及といったかたちで浸透し、その生活に大きな影響を与えている。このような時代の趨勢のなかで、新学習指導要領では、読書の重要性が強調されている。またこれから到来するであろう生涯学習社会においても、読書は基本的かつ重要な学習手段であろうと思われる。読書指導、特に多くの子どもにとって「自分で本を読む」ことに取り組みを始める小学校時代の読書指導の重要性が、益々高まりつつある。

このような背景から、小社教育研究所では経年で読書調査を実施し、学校現場で読書指導ならびに図書館利用指導に役立つ情報を継続してお届けする計画をたてた。今回下記のような概要で実施した調査は、その第1回(89年度)のものである。

調査対象は、都市部の小学校5・6年生に絞ったが、全国規模でなるべく偏りのない結果が得るように配慮した。調査項目については、第1回調査として読書に関する基本的情報がある程度把握しておく必要があり、特定のテーマによって絞りこむことはしなかった。学校での読書指導を考えるためには教師を対象とした調査も行い、子どもと教師双方の視点から実態を見るべきであるが、テーマを限定した分析、および読書に関する教師調査は第2回以降の課題とした。

1. 調査テーマ 小学生の読書行動を探る。概要の把握に加え、学校図書館との関わりを明らかにすることを目的とする。
2. 調査方法 学校通しの質問紙による集団自記式調査
3. 調査時期 1989年12月
4. 調査地域 全国6都市(北海道・北陸・関東・近畿・中国・九州の各地方より1都市ずつ選定)
5. 調査対象 上記6都市の公立小学校16校の5・6年生
6. 調査項目
  - (1)読書の実態……読書の頻度/本の所有状況/書店や図書館への出入の頻度/最近読んだ本とその理由/続けて読んでいる本と雑誌
  - (2)学校図書館……入りやすさ/本の借りやすさ/どんな本を借りるか/学校図書館への希望
  - (3)読書経験と……一番おもしろかった本/読書によって得た経験/今後成長 後読みたい本
  - (4)属性など……生活時間のあらし/勉強の得意不得意/その他

## 7. 有効回収票の構成

※各都市の人口は1989年3月現在。

都市	概要	サンプル				合計
		5年男子	5年女子	6年男子	6年女子	
A	首都圏 中心地 (4校)	114	129	141	147	531 (14.3%)
B	京阪神 中心地 (2校)	135	114	111	116	476 (12.8%)
C	地方都市 人口約160万 (2校)	139	118	162	154	573 (15.5%)
D	地方都市 人口約100万 (3校)	126	125	141	127	519 (14.0%)
E	地方都市 人口約40万 (2校)	213	256	242	244	955 (25.8%)
F	地方都市 人口約20万 (3校)	165	183	159	145	652 (17.6%)
全 体 (16校)		892	925	956	933	3,706

## 8. その他

(1) 以下、この報告書中で「本」という呼び方で総称しているのは一般的書籍(読み捨ての週刊マンガやコミック誌、雑誌以外)である。具体的に、学校図書館で蔵書としているもの、と考えていただきたい。

調査に回答してくれた小学生に対しては、本=マンガ・雑誌以外ということをお知らせに告知した。

1. 調査票の頭に以下のように記載した。

ちゅうい ここていう「本」とは、マンガや雑誌以外をさします。  
マンガや雑誌について聞くときは、そう書いてありますから、  
まちがえないようにしてください。

2. 調査実施時に立ち会っていただく教諭に、上記の注意を必ず口頭で、かつわかりやすく行い、児童にこの点を納得させるようお願いした。

ただし、この指示がどの程度徹底されているか、また当初は本=マンガ・雑誌以外という意識を持って調査に回答をし始めた小学生たちが、いつまでその意識を持続させていたか、などについては問題が残る。

(2) 第I部は、冒頭に調査項目を示し(ケイ囲み内)、単純集計・クロス集計の結果から何らかの有意差や着目すべきと思われる点が見られたものを中心に記述した。図表化されていない部分の集計結果については、巻末の集計表をご覧いただきたい。尚、全項目を通してクロス集計のキーとしたのは、学年・性別・地域・国語の成績・算数の成績・読書の好き嫌い、の6項目である。